黄泉平坂（よもつひらさか）

むかし、まだこの世に人間がいなかったころのことです。神さまたちは、高天原（たかまがはら）とよばれる天にいました。あるとき、男神（おとこがみ）のイザナキと女神（おんながみ）のイザナミがたくさんの島々を作りました。これを国生（くにう）みといいます。国ができあがると、イザナキとイザナミは、たくさんの神々を作りはじめました。風の神、木の神、山の神などです。そして、火の神を生んだとき、イザナミは病気になり、やがてなくなってしまいました。イザナキは泣き悲しみ、その涙から泉の神が生まれました。

残されたイザナキは、なんとかしてイザナミに会いたいと思いました。そこで、死者の国である黄泉（よみ）の国へ出かけていきました。

黄泉の国はまっくら闇（やみ）の世界でした。イザナキが死者の御殿まで来てとびらをたたくと、暗闇の中にイザナミが現れました。イザナキは、

「愛しい妻よ。あなたといっしょに作った国は、まだ作り終えてはいない。さあ、帰ろう」

といいました。すると、イザナミは答えました。

「来るのが遅すぎました。わたしはこの国の食べ物を食べてしまったのです。でも、なんとかしてあなたのもとに帰りたい。黄泉の神さまと話しあうことにします。そのあいだここで待っていてください。そして、決してわたしのすがたを見ないでください」

そして、御殿のおくへ入ってしまいました。

長いこと待ちましたが、イザナミはなかなか出てきません。イザナキは待ちきれなくなって、髪にさしていた櫛（くし）の歯を一本ぽきりと折って、火をつけました。そのともしびをかざして、とびらを開け、御殿の中に入っていったのです。

ともしびに浮かびあがったイザナミの体は、腐（くさ）って横たわり、数えきれないほどのウジ虫がうごめいていました。そして、八つの雷神（らいじん）が、イザナキの頭にも胸にも腹にも、股（また）にも両手両足にもとりついていました。

イザナキは恐ろしくて、逃げだしました。

イザナミはただれてゆがんだ顔をイザナキに向けていいました。

「あなたは、わたしに恥（はじ）をかかせましたね」

そして、ヨモツシコメという恐ろしい女たちに命じて、イザナキの後（あと）を追わせました。

イザナキは、逃げながら、冠（かんむり）にしてかぶっていたつる草を後ろに投げました。すると、山ぶどうが生えてきて、ヨモツシコメたちがそのぶどうをとって食べているあいだに、イザナキはどんどん逃げました。けれども、また追いついてきたので、こんどは髪から櫛を抜き、櫛の歯を折り取って後ろに投げました。すると、こんどは竹の子が生えてきました。そして、ヨモツシコメたちが竹の子を食べているあいだに、また逃げました。

ところが、こんどは雷神たちが、黄泉の国の軍勢を引き連れて追いかけてきたのです。イザナキはつるぎを抜いて、後ろ手に振り回しながら逃げました。ようやく地上との境の黄泉平坂（よもつひらさか）までくると、イザナキは、そこに生えていた桃の実を三つとって、雷神たちに投げつけました。すると、雷神たちは、軍勢もろともあわてて逃げもどっていきました。イザナキは、桃の実に向かっていいました。

「おお、桃の実よ。わたしを助けてくれたように、これからは、人間たちが病で苦しんでいるとき、どうか助けてやってくれ」

そうしているうちに、こんどは、イザナミがみずから追いかけてきたのです。そこで、イザナキは、千人がかりでなければ動かせないほどの大きな岩を、黄泉平坂のまんなかにひきすえて道をふさぎました。イザナキとイザナミは、その岩のこちらとあちらに向かい合って立ちました。イザナミは、怒りにふるえながらいいました。

「いとしいあなた。あなたがこれほどひどい仕打ちをなさるなら、わたしは、あなたの国の人間を、一日に千人、くびり殺してしまいましょう」

すると、イザナキは答えました。

「いとしい妻よ。もしおまえが一日に千人殺すというのなら、わたしは、一日に千五百人の赤ん坊が生まれるようにしよう」

こうして、イザナキが治める葦原（あしはら）の中つ国（なかつくに）では、一日に必ず千人が死に、千五百人が生まれることになったのです。

村上郁再話

資料『古事記・祝詞』日本古典文学大系／岩波書店